

---

# Infinite Stratos theHellhound

片翼の鍵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Infinite Stratosthe Hellhound

### 【Nコード】

N2368T

### 【作者名】

片翼の鍵

### 【あらすじ】

女性にしか扱うことの出来ないパスワードインフィニットストラトスITSによって男女の立場が逆転した世界。この物語は唯一世界でISを動かせる男《織斑 一夏》とそれに巻き込まれてんだかんだいって入学することになった男《宍神 亮》と今まで行方不明となっていた男《神代シン》がIS学園で頑張るドタバタ学園アクションラブコメディです。主人公達のクセのある性格をとくご覧あれ・・・・・・・・・・・・・この物語は作者のノリで書いています。原作と違う所も出てくると思いますが温かい眼で見守っていただけると嬉しいですよ。

この小説は「E S インフィニットストラトス〜イツワリノモノガタリ〜」を書いていた作者がアカウントを忘れたため、少し改良を加えて改めてUPしたものです。  
それでよければどうぞ見てください。  
今まであちらを見てくれていた皆様、どうかこの小説をよろしくお願ひします。

## プロローグ/Story of the Beginning(前書き)

どうも、翼の鍵改め、片翼の鍵かたよくのかぎです。

この小説は最初に書いてある通り、アカウントを忘れてしまったため、

書き直しています。

こんなダメ作者が書く駄文ですがどうぞ。

## ブローグ / Story of the Beginning

..... 4年前

?「お前もつ出るんだよな・・・」

「うん。ごめんね一夏。」

でも、俺はあの人について行けば僕がどんなのか分る気がするんだ。」

?「でも??。お前は大丈夫なのか?」

「大丈夫だよ亮。心配してくれてありがとう。でも、大丈夫だから・・・行ってくるね。」

「ああ。頑張れよ??」

「無理すんなよ??」

「うん。じゃあいつか、いつかまた会おうね一夏、亮。」

?「ああ、行ってこい。」

「はい。千冬さんもお元気で。」

「ああ。お前も無理だけはするなよ。」

「ははは。一夏にも言われましたよ、それ。」

流石に姉弟ですね。」

「ふふふ。ではなまた会おう?？」

「はい。千冬さん。また会いましょう。」

~~~~~

・・・4年後　とある天災のラボ

「ふふ〜。シン君には此処に行ってもらおうことにしよう。」

彼女は1枚の紙を持っていた。

「そうだ、ちーちゃんにも連絡しとかないと・・・」

彼女は電話をするために席を立った。

そのとき、置いておいた紙が床に落ち、そこにはこう書いてあった。

「『I S 学園』に。」

WHY?どうしてこうなった・・・

思い返そう・・・

~~~~~

夏はかなり天気の良い日。

俺は学校の帰りを自転車をこぎながら帰っていた。

「二次元世界に行ってみたいな。」

あえて言おう、俺はオタクであると。

そして、ありもしないことを考えるほど頭もおわっていた。

「今日は、アレを買いに行こう。」

俺は本屋へ向かった。

俺が買うあれとは『IS インフィニットストラトス』である。

俺は友達の勧めもあり買うことにしたんだが、友達Aの話によると主人公織斑一夏が女性にしか動かせない兵器を動かして女の園へG Oする話らしい。

全く意味が分らん。

「これか……。」

俺は1〜7巻までを買い、店を出ようとした……その時

腹に痛みを感じた。

腹を見るとナイフが刺さっていた。

犯人を逃すまいと俺は犯人を掴んだ。

犯人はそれを振りほどこうとしたが、警察がきて取り押さえられた。

ソコで俺は気を失った。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「んで、目が覚めたら真っ白な世界へご案内と……」

どうすんだ俺

「此処はどこなんだよ〜!!」

「ここは生と死の狭間の世界。」

君には悪いことをしてしまったし、他にもいい事をしたから転生

させてあげる。」

は・・・？

「誰だ？」

「私は神。」

転生たつて何処にいけるんだよ。

「今行けるのはISの世界だけ。

行くに当たつて3つだけ願いをかなえてあげる。」

ちよつと待つた。

「なに・・・？」

いいことつて何だよ。

「貴方を殺した犯人は本来あと30人殺すはずだった。

でも貴方が止めたおかげで殺されたのは貴方と後1人だけ。」

なあ、願いつて何でもいいのか？

「うん。何でもいいよ。」

じゃあさ、そのもう1人のほうも転生させてくれないか？

「どつして・・・？」

そいつのことも守れなかった。その償いさ・・・。

「そう。いろいろと問題があるかもしれないけれどわかった。

あとは？」

できれば男にしてくれ。

「うん。」

ISに乗れるってのは？

「それはもうデフォルトとしてついてる」

じゃあ、あとはもうなんでもいいぜ。

「ほんとうにいいの？」

ああ。

「じゃあ、いってらっしゃい。

今度は幸福に生きてね。」

ああ。ありがとう。

そして、俺の意識は暗闇に沈んでいった

## オリキャラ紹介（前書き）

今回はオリキャラ紹介です。  
では、どうぞ。

## オリキャラ紹介

神代 シン

年齢：15歳一（開始時10歳）

誕生日：3月3日

身長：159cm

体重：42kg

性格：温和、内気

趣味：機械いじり、データ改造、読書

好きなもの：甘いもの、優しい人

嫌いなもの：ナマコ、トマト、大切な人を馬鹿にする人

苦手なもの：戦い、ケンカ、剣

髪の色：青みがかった銀色

瞳の色：右：金色（ヴェーダン・オージエ）  
コンタクト時：翠

左：翠

イメージキャラクター：ユーノ・スクライアー（魔法少女リリカルなのはストライカーズ）

本作の主人公。

見た目はあれだがれっきとした日本人である。

しかし、本人も五年前より前の記憶はうっすらとしか覚えていない。

また、コアは作れないがISをコアからいじられる数少ない人である。

そして、操縦者適正S+をたたき出した天災。

スウェーデンの国家代表。

穴神 亮

年齢：16歳

誕生日：4月7日

身長：182cm

体重：49kg

性格：バトルマニア、友達思い、朴念仁

趣味：一夏いじり、剣道

好きなもの：日本刀、心躍る戦い、辛いもの、楽しいこと

嫌いなもの：女「偉いと思ってる奴、甘いもの、勉強

苦手なもの：銃、弓矢

髪の色：薄茶色

瞳の色：右：緋色

左：緋色

イメージキャラクター：スコール・レオンハート（FF？）

織斑一夏の友達であり、転生者。

IS学園1年1組所属。

暗部穴神家の次期当主であり、17代目<sup>ろっか</sup>狼牙を名乗るべきなのだが、本人はまだ継ぐ気はなく、未だに名乗ってはいない。

IS操縦者適正A -

## オリキャラ紹介（後書き）

なんか、少しやりすぎた感が・・・

## オリIS紹介（前書き）

連続投稿です。

次はオリISです。どうぞ。

## オリIS紹介

ヘルケルベロス

世代：第4・5世代

SE：1800

カラー：漆黒のボディーに赤のライン

形状：

腕は肘から手首に向けてどんどん広がっていくような形状をしている。

脚はかなり細い。

背中には2基ずつにまとめたビットを4つつけており、残った2基は肩の付け根辺りにつけてる。

基本的にバイザーをつけているが、任意で展開しないことも出来る。

パススロット：なし

武装：

ケルベロスノトライハウンド

両手に持っている3点バーストの銃。

ちなみにビーム兵器である。

3つある銃口の下にはビームブレード発生装置がついており、ケ

ルベロスの方が刃の部分が長い。

なお、右手に持つのがケルベロスで、左手のがトライハウンドである。

詳細は本編で。

リベリオンノフェンリル

ヘルケルベロスがもっている唯一の近接格闘装備。

こちらもしベリオンの方が刃が長い。

右手にリベリオンを持ち、左手にフェンリルを持つ。

主人公は事情があり、あまり使わない。

ガラム

ヘルケルベロスの背部についている10基のビット兵器。

これには、近距離用のソードモードや、遠距離用のバスターモード、防御用のシールドモードがある。

こちらも詳細は本編で。

フリースヴェルグ

ヘルケルベロスがもっている唯一の長距離用の兵器。

大型のビームライフルで、持っている武器の中で2番目に威力が高い。

ヘルDESTロイ

ヘルケルベロスが持っている中で一番威力が高い兵器。

荷電粒子砲であるが、カートリッジを使っており、

1発のカートリッジで打てる回数は5回で、搭載個数は3つだけである。

しかし戦闘中はあと、取り替えることが出来ない。

なお、フルチャージだと3発だけしか打てない。

シールドピアースカスタム？

両手首に2つずつ付けられた、小型のシールドピアース。  
しかし、小型化したため、打ってもせいぜい2発までである。

主人公が持つIS。

銃撃戦が主体となっているが、本機は全距離対応である。

篠ノ之束博士とシンが共同制作した機体であるため、4・5世代と  
なっている。

待機形態は右腕についた2つの腕輪。

九尾

世代：第5世代

SE：1300

カラー：黄色と白を基調とし、所々オレンジがある。

ビットは全体的に黄色で、下の方が白である。

パススロット：空き容量なし

武装：

細雪

白式についている雪片式型と形状などが似ている武器。  
こちらにも展開装甲が試験搭載してある。

### 紅蓮式型

零式がもっているIS用の日本刀。  
鞘もついており、任意で出したり出さなかったりできる。

### 九尾

腰の後ろのほうに九つついている大型のランス型ビット。  
炎を纏わせることが出来る。

### ワンオフ・アビリティ：

#### 『百殺一幻』

細雪に組み込まれていた能力。  
簡潔に言うと零落白夜の、威力をそのままにし使用エネルギーを  
少し減らしたもの。

### 亮の専用IS。

東とシンが共同で作った2体目の機体。

シンの機体のデータを使っている為、第5世代機として完成した。

この機体は近距離特化の機体であるため、遠距離武器が搭載して  
ない。

また、この機体も一部に展開装甲を搭載している。

待機形態は右手中指の指輪。

## オリIS紹介（後書き）

何かやりすぎた感が・・・

五月十七日亮の機体設定変更しました。

## 注意というか前書きというか

あくまでもこの物語の主人公は神代シンです。

しかし、事情があり、これから当分はサイドストーリー 宍神 亮編  
となります。

理由といたしましたはただ単に亮の過去を書く気が無いので先にサイドストーリーとして書かせてもらうことで解決することにしました。

また、まことに申し訳ありませんが、  
こちらの都合により、一時的に何時までかは分かりませんが、  
活動を停止することになるかもしれせん。

何時から何時までかは自分でも予想できませんが、  
何時かの間に活動停止、または作品自体を凍結するかもしれない  
ダメ作者をどうかお許しください。

これからもこの小説をよろしく願います。

## 第1話 / Meeting

はい、こっちに来て4年が経過しました。

俺の名前は亮、穴神 亮だ。

父さんの名前は穴神 狼牙である。

母さんは・・・産んで直ぐに死んだから覚えていない。

今、俺はとある部屋で人を待っている。

「父さん、まだ来ないの？」

「ああ、もう直ぐ来るはずだ。

それに、一応私達と同じ立場の人だ。だらしない姿など見せるなよ。」

「わかったよ父さん。」

あえて言うなら俺は暗部・・・つまりは裏の人間・・・っていうことになる。

暗部というより更識を思い出すのは俺だけではない・・・はず。

「（でも、誰なんだろうな）」

「失礼する。」

「やっと来ましたか、十六代目盾無。」

十六代目！！しかも盾無だと！！  
ということはこの人が前盾無だということか……。

「久しぶりだな、十六代目狼牙。」

「ああ。ひさしぶりだよ。」

「ふ……そうか。……でそつちが次期狼牙かい？」

「ああ。これが私の自慢の息子の亮さ。  
でそちらが？」

「ああ。次期盾無さ……。」

「そうかい。でも、今回は引越すことになったからね。  
こつちにいられるのもあと少しだけなんだ。」

「そうか……では 亮くとあつちで遊んでなさい。」

「わかった。」

「亮、ちゃんとエスコートするんだぞ？」

「分ってるよ父さん。」

## 第2話 / Thoughts?

「ねえ、亮君。」

「なに？」

「次期狼がでしょ？重荷におもわないの？」

「重荷なんて思わないよ。」

「だってこれは『信賴してくれてる証拠』だから。」

「うん。」

「それに、君みたいな可愛い子にあえたからね。」

「かわつつ／＼／」

「やっぱり可愛いよね。」

「惚れちゃっつぷ〜。」

「（まあ、俺なんか惚れる事は無いだろうっけどな……。）」

「どうしたの？」

「そっぴやさ、俺、引っ越しちゃっつんだ。」

「引っ越し？」

「そう引越し。」

だから会えなくなるから、はい。お守り。」

俺は首から掛けていたネックレスを渡した。

「これいいの？」

「いいよ。君と俺が知り合いだったたった1つの証拠になるならね。」

証拠、彼女と知り合ったという証拠

「それに、俺が言った言葉、それをもっていれば忘れることは無いと思うからさ……。」

そう、だから、

「それを俺だと思って大事にしてくれると嬉しいな？」

-----

「ねえ、亮君。」

「なに？」

「次期狼がでしょ？重荷におもわないの？」

私は訊いてしまった。

私と同じ境遇をもつ彼に。

「重荷なんて思わないよ。

だってこれは『信頼してくれてる証拠』だから。」

彼はそう言った。

「うん。」

「それに、君みたいな可愛い子にあえたからね。」

「かわつつ／＼／」

い、今りよ、亮君に可愛いといわれた。

気が付いたら亮君は何か考えているようだった。

「どうしたの？」

「そついやさ、俺、引っ越しちゃうんだ。」

「引越し？」

「そつ引越し。」

だから会えなくなるから、はい。お守り。」

彼は首から掛けていたネックレスを渡した。

「これいいの？」

「いいよ。君と俺が知り合いだったたった1つの証拠になるならね。」

証拠、私と知り合ったという証拠

彼はそういった。

「それに、俺が言った言葉、それをもっていれば忘れることは無いと思うからさ……」

それを俺だと思って大事にしてくれると嬉しいな？」

-----

数日後……俺は車の中にいた。

「亮くん。」

「。」

「もう行っちゃうの？」

「ああ。でも、また会えるから。いや、会いに行くから……」

「うん。」

「だから！またね。」

「またね、亮。」

そうして僕の乗った車は出て行った。

「（結局、思いは言えず仕舞いなんだな・・・）」

第3話 / It gets acquainted . 1

.....

あそこを出発してから早数時間、新しく住む家に着いた。

「此処が新しい家だ。」

「へえ〜。」

あれ？でもどうして引越すことになったんだろ？

「それは、政府からの指示だ。何故かは知らんがな。」

「へえ〜。」

「そうだ。お前を鍛えるためにお前には道場に通ってもらおう。  
どうせ、今まで独学だっただろう？いい機会だから形だけいい  
から覚えて来い。」

「分ったけどどこの道場？」

「篠ノ之道場だ。」

うわ〜。あの人切り包丁がいるところか。

「・・・つとこだな。  
頑張つてこいよ？」

「はい。逝つて来ます。」

「あ、ああ。行っていい。」

そうして俺はその道場の門をくぐった。

~~~~~

俺は道場の中に入った・・・がしかし、早速誰かに見つかった。

？「む？誰だ？」

「すみません。道場の方ですか？」

俺は最近こつちに引越してきた宍神亮です。

こちらで剣道でも習おうかと思ってきたのですが・・・」

「そうか、私は織斑千冬だ。

ちょうどいい、今私の弟ともう1人が打ち合っているところだ。

見ていくか？」

なんと！！織斑千冬さんですと！！

「え〜と、じゃあ見させていただきます。」

俺達は打ち合っているところへ向かった。

~~~~~  
~~~~~

俺らは今打ち合っている一夏少年達を見ていた。

「め〜ん!〜!」

バシーン!〜!

「はあ〜すごいですね〜一夏君。」

「まあな。あれでも私の弟だからな。」

「へえ〜。」

そうして話していると一夏達がこっちに来た。

「千冬姉、コイツ誰?」

「ああ。一夏にも紹介しよう。」

新しくここに入ることになった穴神亮君だ。仲良くしてやってくれ。」

「穴神 亮だ。よろしくたのむ。」

「織斑一夏だ。一夏って呼んでくれ。」

「篠ノ之箒だ。よろしく頼む。」

「ああ。よろしく頼む一夏、篠ノ之。」

「もう時間も時間だからな、送ろう。」

「ありがとうございます。」

こうして俺は一夏たちと知り合った。

第4話 / It gets acquainted : 2

今、俺達は家への帰り道を歩いていた。

「で、家は何処なんだ？」

ふとそんなことを千冬さんが聞いた。

「もう直ぐですよ・・・と、此処です。」

「あ！家の隣だ！！！」

ん？そうなのか。

「ん？亮か、お帰り。」

「ただいま、父さん。」

「では、私達は帰るぞ。」

「うん。じゃあな亮！」

「じゃあな一夏、また明日。」

こんなやり取りの後、一夏たちは家に帰っていった。

翌日~~~~~

俺達は剣道の練習をしていた。

「うはあく亮って強いんだな。」

「そうか？」

そういつて会話してるがここに千冬さんはいない。  
なにやら学校に行ってるそうだ。

「うむ。私もこんなに強いのは見たことが無い。」

「いや、せいぜい俺が自分でも出来るほうだといえるのは抜刀術・  
・つまりは居合いだけだ。」

「それでも十分じゃないか。」

「それにたった5時間で形をマスターするなんぞ普通の奴にはでき  
んぞ。」

「そうか？」

そうして話していたら、千冬さんが帰ってきた・・・誰かと一緒に。  
「ただいま帰ったぞ一夏。」

「ただいま〜。おや？ソコの君が昨日からここに入った子かい？」

これは、どうやらこの後有名になる天災東さんではないか。

「え〜っと、宍神亮です。よろしくお願いします。」

「うんうん…よろしくね、りょーくん」

「えっとそのりょーくんってやめて…くねなくていいです、はい。」

やめてもらおうと思ったたら東さんに思いっきり睨まれた。

「それよりもさっき話していた居合いが気になるんだが見せてもらっていいか？」

「それ、聞いてたんですね…いいですけど、千冬さん、相手になってもらっていいですか？」

なんか、今は千冬さんと戦ってみたい。

「うむ。いいだろう。」

~~~~~

今、俺は千冬さんと向き合っている。

そして、右手に鞘に入った木刀を握っている。

「いきますよ。」

「何処からでもかかって来い。」

そういわれて直ぐに俺は居合いの構えをした。

「いきます…！」

鞘から抜いて一気に距離を詰めた。

ビュオン!!

「!?!?!?」

余りの速さに千冬さんも反応できなかつたらしく一撃を入れた。自分で言うのもあれだが俺の居合はそこらの居合に比べてすごい早さだと思つ。

「勝負あります。」

そういつて周りを見ると一夏は勿論、東さんもポカーンと口をあけて驚いていた。

そして、一番にその状況から戻つたのは東さんだった。

「すごいよ。あのちーちゃんに一撃を入れるなんて、東さんりょーくんに興味をもっちゃった。」

「は、はあ。そうですか。」

どうやら興味をもたれてしまったらしい。

俺は大丈夫だろうか・・・

第5話 / 5 years later - led

5年後

10歳になった。

今もしているのは盾無（この前何処で知ったのか手紙が届いたが、盾無を継いだらしい。）のことを気にしていた。

俺は確かに盾無が好きだ。（改めて口に出すととても恥ずかしいな。）  
しかし、俺に、つりあわないことは重々承知である。

そういえば、この前東さんに「後で家に来て。」と言われていたな。

「行く……か……。」

今この家の住人は1人だけだ。

父さんは暴動が起きて死んだ。

本当は十七代目を名乗らなきゃいけないんだけども……俺にはまだそのチカラは無い。

「……行って来ます……。」

俺はいつも行っている篠ノ之道場のほうへと足を向けた。

~~~~~

「こんにちは。」

「はい。亮君ね、私達明日引越すんだ。  
だから、千冬ちゃんにも言ったけれど道場をよろしくね?」

「はい。わかりました。」

「今日は何の用かな?」

「今日は東さんに用があつてきました。」

「東は・・・」りょーくん、こっちこっち。「じゃあ、私は失礼しますね。」

「はい。今までありがとうございました。これからもお元気で。」

「亮君も元気でね。」

「はい・・・東さん、何のようですか?」

「今日はお知らせがあつてねえ、・・・ねえ亮君。ISに乗ってみたくはないかい?」

ISに・・・って

「それは女にしか乗れないはずじゃないんですか?」

「ううん。この前調べただけど、りょーくん。乗れるみたいなんだ。」

だから、高校の入試のときにISを動かして頂戴。」

「え？」

「それだけだから。ばいばい。」

「え？え？」

あ・・・気が付いたら東さん消えてる・・・  
とりあえず、そうすればいいの・・・かな？

第6話 / Beginning of school life (前書き)

そろそろ亮編も終わりになります。

引き続き本編をお楽しみいただけると嬉しいです

## 第6話 / Beginning of School life

あの日から5年の歳月がたった。

結局、俺らは試験会場でISを動かし、めでたく‘IS学園’に入ることになった。

そういえば、俺はまだ、前世で3巻までしか読んでないからどうなるかわからないんだよな。

正確に言えば読んだというより知っている（立ち読みしたから）だけなんだが。

ちなみにキャラだけは全員知っている。

というよりもうここは現実リアルなんだ。物語フィクションじゃない。

・・・俺はみんなを守ることができるだろうか・・・。

「なあ・・・。」

「なんだ一夏・・・。」

今は入学直後の教室。

SHRまで時間があるのかそれぞれが話している。

「これは・・・想像以上につらい・・・。」

「・・・そうだな・・・。」

もちろん起動した次の日にはニュースや新聞などで思いつきり報道され、一夜にして超有名人になってしまった。

「なあ一夏・・・。」

「なんだ亮……。」

「今なら、動物園のパンダやウーパールーパーの気持ちがよくわかるよ……。」

「ああ、そうだな……。」

はあ……。結局……。どうなるかなあ……。

「織斑一夏です。よろしくお願いします。」

そういえば、このクラスの担任はあの織斑千冬さんらしい。

パン！

「何をよそ見しておるか馬鹿者。次はお前の番だ宍神。」

おっと、考え事してた間にSHRが始まっていたみたいだ。

「宍神亮ししがみりょうです。趣味は剣道に料理、得意なのは家事全般です。

ISについては全くのド素人なのでわからないところがあったら聞くと思います。

その時は快く教えてくれると嬉しいです。

一年間よろしくお願いします。」

シーン

あれ？どこかいけませんでしたか？

「いや、完璧だ・・・というより完璧すぎるくらいだ。」

「そうですか・・・。」

まさかの心を読まれただど！！

まあいい。

これからは（とりあえず）この学校生活をエンジョイしよう。  
いろいろあるかもしれないけど、まあ、何とかなるだろ！！

「余所見をするな！」

「はい。」

とりあえずは怒られないようにするしかないな・・・。

エピソード/The story continues to this st

はい！という訳でこの話で0・5章サイドストーリーー亮編は終わり  
です。

引き続き本編をお楽しみください。

入学してから4日。今クラスが沸いている。

「なあ亮。今日さ転校生がこのクラスに来るらしいよ。」

今、教室が騒がしいのはこのクラスに転校生がくるのである。

そこまではまだいい。

しかし、しかしなのだ

「嘘だろ。今日はまだ入学から4日しかたってねえぞ。」

そう。まだ入学4日なのだ。

「だよな〜」

「は〜いみんな〜席について〜」

皆は席に着いた。

「山田センサー今日転校生が来るのって本当ですか!。」

「はい〜。皆さんももう知ってるみたいですね〜。

じゃあ、神代くん入ってきていいよ〜。」

「はい。失礼します。」

転校生が入ってきた。  
が

「お、男？」

「まじかよ。」

「神代 シンです。学校についてはよく知らないのですがこれから  
よろしく願います。」

彼が入ってきたことによって物語は急展開を迎える。

一体如何なってしまうのだろうか……？

L e a d i n g t o t h i s s t o r y . . .

## 0話 / Start (前書き)

連続投稿3話目です。

出来ることなら後3日以内に前ので投稿した分の話を投稿できたらなーと思ってます。でわ、どうぞ。

## 0話 / Start

場所は変わりとおある部屋・・・・・・・・・・・・・・・・

プルルルルルルル

「ん？電話か。」

僕は近くに置いておいた携帯を手を取った。

「はい、もしm「もしもし」みんなのアイドルたb・・・」ブツッ。

プルルルルルルル

「はいはい。」

「いきなり切る事はないじゃないか。」

「貴方がいきなり変な事をするからですよっと。  
今回は何のようですか？」

「ん？ああ、しいくんにはね、IS学園に行ってもらうことにしたよ。」

「何故行く必要があるんですか？説明を求めます。」

僕は電話してきたひとー篠ノ之束さんなのだがーに説明を

求めた。

だってそうでしょう。

いきなり学校に行けと言って来たのだから。

「だいたいにしてIS学園には男は入れないはずですけど・・・」

「その辺は心配ないよ。だっていつくんとりょーくんがIS動かして入学したから・・・」

「一夏さんと亮さんが!？」

「うん。だから、しーくんにはいつくんとりょーくんを助けて欲しいんだ。」

それなら理は適っている。

「後もうひとつ言うならね・・・」

「あともうひとつ言うなら?・・・」

「面白そうだからだよ!！」

「んなつ!！」

そんな理由が・・・

「じゃあ、もうちーちゃんには連絡を入れてあるから。」

まったく、準備の早い人だ。

「分りましたよ。じゃあ、行ってきます。」

「うん。行ってらっしゃい。」一プツ

電話を終えた僕は日本へ行く準備をし始めた。

「この機材とこの機材とこの機材は持って行って、あ！パソコン忘れる所だった。」

こうして着々と準備を済ませていく。

「パソコンはこれとこれでオッケーだし、服は・・・まあ、これだけあればいいか。」

時計を見た。

集中していて気が付かなかったがもう2徹である。

そして、時間は12時

そろそろ空港へ行って日本へ向かうか。

「ふう。一夏さんたち、どうなったかなあ・・・」

僕は空港で便を待ちながら呟いた。

「ん？この便だ。早く行こう。」

僕は飛行機に乗った・・・日本でこれからおきることを知らずに・・・

0 話 / S t a r t ( 後 書 き )

•  
•  
•

1話 / J a p a n (前書き)

連続投稿4話目。そろそろ疲れてきた今日この頃。

## 1話 / Japan

「あの人達元気にしてるかな？」

僕は飛行機の中で1人喋っていた。

「にしても東さんもいきなり『IS学園に行きなさい。』だもんな  
」

はあ。考えただけでため息がでる。

おおっと。ため息をすると幸福が逃げるんだったな。

「でも理由がね……」

そう。そこが問題なのだ。

1つ目は織斑一夏と穴神亮を助けてあげてほしい。

とのことだった。

1つ目のほうはまだいい。

「しかしな……」

2つ目が大問題なのだ。

なんだ『なんか面白そうだから』とは。

「はあ……」

そういえば、わたっていたのを一応読んでおかなければ

「うわっ、もうこれ覚えてる内容じゃないか。」

ん？そろそろ日本に着くな。

「IS学園か・・・正直気が乗らないな・・・」

「お客様もう直ぐ目的地に到着します。お忘れ物の無いようご確認よろしくお願ひしますー」

「そろそろか・・・」

そう、そろそろだ。

そろそろ、3年前に飛び立った日本の地ー故郷に降り立つのだ。

「ふう。長かった。」

今は、空港の中。織斑先生を待っている。

「ん？なんだあのニュー・・・げ、」

そう、不意に目に入ったニュースで僕が出ていたのだ。つまり、

「あの子じゃない？」「確かに可愛い・・・」「はあはあ。」

と、大変なことになっているのだ。

そのとき救世主は現れた。

「すまない。遅れてしまった。私の名前は織斑千冬。IS学園の教師をしている。」

「え〜っと僕の名前は神代シンです。よろしくお願ひします。」

「うむ。あの馬鹿の助手をしていたと聞いていたからどんな変人かと思ったら普通なようであった。」

では車に乗れ。IS学園のほうへ向かう。」

「分りました織斑先生。」

「では行くぞ。」

そうして。僕達はIS学園へと向かった。

1話 / Japan (後書き)

まだまだ続くね・・・

## 2話 / Reunion (前書き)

連続投稿5話目。マジで疲れてきた・・・

## 2話 / Reunion

乗り回されること3時間、ついにIS学園に到着した。

「ほえ〜此处がIS学園か〜」

本当に大きい。大きすぎてビックリしたよ。

「ここで待っていればもう1人先生が来るはずだ。」

「はい。分かりました。」

「では、私は会議があるからコレで失礼する。」

「はい。織斑センセ。」

「うむ。そろそろだと思っんだが・・・」すみませ〜ん。「・・・  
やっと来たか。」

「はい〜。神代君ついてきてね〜。」

「はい。え〜っと。」

「あ、自己紹介がまだだったね。私は山田真耶です。よろしくね。」

「あ、はい。山田センセ。」

「じゃあここで呼ぶまで待っててね。」

「はい。わかりました。」

さて、どうなるかな・・・

～SIDE1夏～

「なあ亮。今日さ転校生がこのクラスに来るらしいよ。」

今、教室が騒がしいのはこのクラスに転校生がくるのである。

そこまではまだいい。

しかし、しかしなのだ

「嘘だろ。今日はまだ入学から4日しかたってねえぞ。」

そう。まだ入学4日なのだ。

「だよな～」

「はいみんな～席について～」

皆は席に着いた。

「山田センセー今日転校生が来るのって本当ですかー。」

「はい～。皆さんももう知ってるみたいですね～。」

じゃあ、神代く～ん入ってきていいよ～。」





「お、織斑先生。助かりました。」

「山田先生。これくらいはどうかできるようになって欲しい。  
あと、神代。お前は織斑の隣だ。早く座れ。」

「は、はい！織斑先生。」

僕は言われた席に向かい、席に座った。

「なあ。俺の名前は織村一夏だ。すきによんでくれ。」

「はい。僕の名前はさっき言ったとおり神代シンです。よろしくお  
願ひします。一夏さん。」

「ああ。よろしくな、シン。」

「よし。それではSHRを終わるぞ。」

長かった最初の挨拶はようやく終わった。

2話 / Reunion (後書き)

は  
す

3話/Companion(前書き)

連続投稿6話目。もう限界だ・・・

### 3話 / Companion

授業が終わって、今は授業と授業の間の休み時間

僕は自己紹介をしていた。

「改めて、一夏さんには言いましたけれども、神代シンです。」

僕は無難に目の前の宍神亮さんに自己紹介をした。

「おう。宍神 亮だ。亮でいい。よろしく頼むぞシン。」

「はい！よろしく願います。亮さん。」

「はあ。にしても男が増えて助かったよ。」

「やっぱりおおいに越したことはないな。」

「だよな。だって此処女ばっかで緊張するしよ。」

「ははは。苦労してるんですね。」

ほんと、苦労してそうだ。

「まったくだ。てかシン。何他人事みたいに言ってるんだよ。」

「え？」

「え？ってなあ。お前も今日からこの学校の生徒なんだぜ。」

「あ……忘れてた……」

そつだ。僕も今日から此処の生徒だつた。  
大変そつだな

「ん？もう時間だな。次は千冬姉の授業だからな座ろつぜ。」

「そつだな。」

「うん。」

そして少ししてから織斑先生が入ってきた。  
ちゃんと話を聞いておかないと……

#### 4話 / Representative (前書き)

連続投稿7話目。もはや此処まで来るとよくやったな〜と思える。

#### 4話 / Representative

さっきの授業が終わって休み時間。

ついに女子の質問攻めに会った。

「ねえねえ、シン君って何人？」

「こんな外見ですけどコレでも日本人ですよ。」

「ねえ、趣味は何？」

「機械いじりとデータいじりと読書……ですかね？」

「じゃあじゃあ主にどんな本を読むの？」

「主に参考書や哲学系の本をよく読みますね。」

はあ。早く質問終わんないかなあ。

「しつもんしつもん。シン君って付き合っている人いるの？」

「あの～それは黙秘権を行使させていただきます。」

「じゃあじゃあ……早く席に着け。授業を始める。」……じやあまた後でね。」

あ、あとでって、またこんなことがあるの？

まあ、この授業が終わればご飯だし、まあいいか。

「さて、もう候補は決めてあるんだが神代が入ってきたからな、  
クラス代表候補を決めなおそうと思う。」

「先生、質問があります。」

「なんだ神代言ってみろ。」

「なんで僕が入ってきただけで候補を決めなおすんですか？」

これは今の中で一番気になっていることだ。

「そのことは気にするな。とりあえず前も言ったとおり自薦他薦は  
問わない。」

「誰かいないか。」

「はい」

一人の生徒が手を上げた。立候補かと思われたがそうではなかった  
ようです。

「私は織斑君を推薦します。」「なっ………!？」

「私もそれがいいと思います」

「え………？」

「じゃあ、私は宍神君を。」「んなアホな！」

「私も！」

「ええ、何で俺っ！？じゃ、じゃあ俺はシンを推薦する。」

「え、ええ！ぼ、ぼく〜！！」

「くっじゃあ俺もシンを推薦する。」

「じゃあ、私も。」

「私も〜。」

「そ、そんな〜（泣）」

「納得できませんわ！」

お！誰かが異議を申し立てたようだ。

この人言い方はあれだけどいい人なのかな？

「男がクラス代表だなんて、いい恥晒しですわ！！ このセシリア・オルコットに、そんな屈辱を一年間も味わえとおっしゃるのですか！？」

そんな事を一瞬でも思った自分が馬鹿だったと、シンは反省した。彼女はプライドが高い上、どうやら女尊男卑主義者のようだ。

そして彼女の怒りは止まらない。いよいよもってとんでもない所へ走りだした。

「大体、文化としても後進的なこんな国で暮らさなくてはいけない事自体、耐え難い屈辱だというのに……！！！！」

「……イギリスだって、大したお国自慢は無いでしょう。世界一まずい料理で何年覇者ですか？」  
流石にこれにはカチンときた僕は、内心の怒りに任せて暴言を吐いた。

「美味しい料理はたくさんありますわっ！！あなた、私の祖国を侮辱しますの!？」

「その侮辱を先にやったのはあなたでしょう！！  
それにねえ、君さあ、僕の事を馬鹿にするのはまだ良いけど、  
これ以上一夏さんたちを馬鹿にするのは許さないよ……。」

僕はこれ以上はないほど怒りをこめていった。

「決闘ですわ!!！」

「いいですよ。簡単にひねりつぶしてあげます。」

「私が勝ったらあなたを小間使い……いえ、奴隷にして差し上げますわ!!！」

「好きにしてください。で、ハンデはどのぐらいつけねばいいですか？」

「あら……早速、お願いかしら？」

それをハンデの申し入れと思ったのか、セシリアがフフンと鼻を鳴らした。

「僕が”どのぐらい、ハンデをつければ良かったって事ですよ」「は……?」

.....

一瞬の沈黙。

そして、クラス中が爆笑した。

「ちよつと神代君、それ本気?」

「男が女より強いなんて…… ISが出来る前の話だよ?」

「もしも男と女が戦争したら、三日持たないって言われてるのに」

次々に飛ぶ言葉。

「貴方達こそ本気ですか?それはISを動かさないからの話  
なら、‘ISを動かせる男’は如何なんでしょうね?」

クラスの皆は息を呑んだ。

「分ればいいのです。」

「決まったな。勝負は次の月曜、第三アリーナで行う。織斑とオル  
コット、

それから、神代と宍神はそれぞれ、準備をしておけ。

では、授業を始める。」

はあ〜・・・コレからどうしようかな？

4話 / Representative (後書き)

よし！今日は此処まで。  
ではノシ

5話 / Roommate (前書き)

やっと前に追いついた。



そういわれて、僕は渡された紙を見た。  
1022号室・・・嫌な予感しかしない。

「じゃあ、荷物はもう部屋に入れてあるので寄り道せずに帰ってくださいね。」

「はい、分かりました。」

「じゃあ一夏さん、亮さんまた明日。」

「ああ、じゃあな。」

「ああ。また明日。」

僕は寮の自分の部屋へ向かって歩き出した。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「ここか・・・」

ガチャ

「へえ〜意外と広いね・・・と、すいませ〜ん。誰かいますか？」

「むむ。その声は・・・シーシ〜!!」

来た。しかも抱きついてきた。

というかこの人が一緒の部屋とか勘弁して欲しい。

「やめてください。本音。」

「ええ〜、シーシ〜のいけず〜。」

「はあ・・・とりあえず僕は荷解きをするので。」

そういつて会話を打ち切り荷物を解き始めた。

「本音・・・使っているベットはどっちですか?」

「シーシ〜いつもどおりの口調にしてくれないとやだ〜。」

「わかったよ本音。でも・・・」

「わかってる。嫌われたくないからいつもは敬語にするんでしょ?

そこらへんは個人の都合だから気にしないよ。」

「ありがとう。本音!!(にこっ)」

「ふみゅ!〜うん。気にしないでノノ

ああ、ソコの入り口側のベットだよ。」

「うん。わかった。」

そういつと僕はパソコンとかを設置し始めた。

〜30分後〜

「ふう。片付け終わった。  
よし、じゃあ着替えよう。」

そういうと、僕はパジャマに着替えた。

「ん？あ！シーシーもきぐるみパジャマなの？」

「ん？うん。僕は犬だよ。」

僕は黒い犬のきぐるみを着ていた。

「じゃあ、本音おやすみ。」

「うん。おやすみシーシー。」

そうして1日目は終わった。

6話 / Immediately before the combat (前書き)

だいぶ無理やりですが気にしない方向性で・・・

6話 / Immediately before the combat

.....

あれから数日がたった

まあ、ぶっ飛んでるんだけど、今日は代表決定戦。

ルールはバトルロイヤルらしい。

今は一夏たちの機体が出るのを待っている。

「織斑君！宍神君！」

「先生おちついて、さあ深呼吸。すってー、はいてー、すってー、す  
ってー。」

「はいそこで止める。」

「うっ。」

山田先生が息を止め苦しそうにしている。

「ぶはあ、ま、まだですか？」

バシン！バシン！

「目上の者には敬意を払え馬鹿者共。」

「「りよ、了解。」」

「で、何のようだったんですか？」

「そうでした。来ましたよ。織斑君たちの専用ISが。」

「そうなんですか。じゃあ、僕は別のピットに行きます。」

「え？なんでだ？」

それくらいは分るつよ一夏さん。

「一応、敵ですからね・・・では。」

そういつて、僕は今いたピットを出た。

~~~~~

そういえば忘れていた。

スウェーデンにいる知り合大統領いに電話で確認を取らなきゃ。

ブルルルルブルルルガチャ

「もしもし私だ。」

「もしもし、ロキさん？」

「ん？シンか。なんのようだ？」

「いや、今日代表決定戦んだけどあの機体を使っていいんだよね？」

「応言つとあの機体とは僕の専用機である。」

「ん？まあ、いいだろう。」

「場合にもよるんだけど、代表だって事も言っていていいよね？」

「まあ、その場合はしかたない。言ってもいいぞ。」

「了解。じゃあ、これから戦いだからじゃあね。」

「おう。頑張れよシン。」

僕は電話を切った。

「じゃあ、いこうか『ケルベロス』。」

さあ、

「行くよー！」

僕はフィールドに躍り出た。

6話 / Immediately before the combat (後書き)

ようやく主人公のISが出ました。

次回は戦闘シーンです。

・・・うまく書けない・・・。

7話 / This time I turn on my behalf .

何か設定より弱くなっていますが事情は次回説明します。

7話 / This time I turn on my behalf .

フィールドに出るとすでに人はそろっていた。

「皆さんに最後にチャンスをおげますわ。」

そんなもの

「「「必要ないね／＼よ」」」

「そうですか。では此処で・・・！」

「遅いよ。もう戦いは始まっているんだ。」

僕は手に持った2つの銃『ケルベロス』と『トライハウンド』を撃ちながらいった。

「く・・・！その程度！！」

対するオルコットさんはその手に持つ大型BTライフル　スター  
ライトMk?と一致　を撃ってきた。

「遅すぎるよ。その程度で代表の卵なんて笑わせてくれるね！！」

こちらはオルコットさんの機体の周りを回りながら手に持った銃を撃っていた。

「じゃあ、そろそろ行くかな？」

僕は手に持った銃からブレードを発生させ、オルコットさんに切りかかった。

「そんな！！？中々やりましてね。仕方が無いから本気を出させていただきますわ。」

やっときたか試作型自立機動兵器『ブルーティアーズ』 ややこしいから以下ビット！！！！

でも

「弱点は読んでいる！！！」

そして僕はオルコットさんの攻撃を回避しながらオルコットさんに近づいた。

「オルコットさんは代表候補生なんだよね？」

「ええ。そうですね。それがどうかしまして？」

ニヤリ

「じゃあ、もちろん聞いたことがあるよね。」

『漆黒の狂犬』の名を。」

「所詮それは幻の存在ですわ。」

10基のビットを動かしながらの銃撃戦なんて常人には不可能ですもの。」

うん。ここで実践してもいいんだけど。

じゃあ

「さあ、地獄の輪舞ロンドでも踊ろうか。」

「そのセリフは！」

「さあ、踊り狂え『ガルム』！！」

僕は背中にあるビットのうち4基を出した。

ガルム達は容赦なくオルコットさんを喰らっていく。

「つくう！！」

「その程度かい？代表候補生様はよ！！」

「そんなわけありませんわ。これで終わりです！！」

ニヤリ

「時間は稼いだ。あとはよろしく頼むよー夏さん！亮さん！」

「まさかそのために！」

「これでオルコットさんのを大幅にけずって見せる。」

僕は後付武装イクソライザ（正確には今回だけ1つ標準装備を外したんだが）としてつけていたミサイルを前面に向けて至近距離で全段撃った。その影響でシールドエネルギーも0になり僕の負けは決まった。

「神代シン脱落。残るはセシリア・オルコット、織斑一夏、六神亮  
! !」

7話 / This time I turn on my behalf .

出来れば感想など頂けると嬉しいです。

これからもよろしく願います。

また、読んでくださってる読者の方ありがとうございました (

— ) m

「あゝあ。オルコットさん強かったなあ。」

あの、状況での判断能力は目を見張るものがある。

？「そう？貴方の方が強いとお姉さんは思うのだけれど。」

「何の用ですか、ロシア国家代表であり、生徒会会長でもある、  
対暗部用暗部更識家十七代目当主更識盾無さん。」

「！？そ、そこまで知ってるのね。」

かなり動揺しているようだが、一息ついて話し始めた。

「いや。今日の放課後に模擬戦の相手でもしてもらおうかと思って  
ね。」

模擬戦か・・・

「特に用事も無いのでいいですよ。」

「そう。じゃあまた放課後にね。」

「は、はあ。」

なんだろう。普通に話していただけなのになんか疲れた。

「あゝシーシー。」

「頼むからその呼び方だけは勘弁してくれ本音。」

「え〜。やだよー。」

「はあ。で？何のようだ？」

コレが質問

「さつきある人に絡まれて疲れてるんだ。」

コレが愚痴。

「シーシーさあ、放課後お嬢様と戦うんだよね？」

んなっ！！？

「んなっ！！？何処で知ったんだ！？」

「さつき話してるの聞いちゃったんだよー。」

聞かれてたのか。

「そういえば、一夏さんや亮さんの試合を見に行かないのか？」

「うん〜だってもう終わったと思うし〜」

本当だ。話していたから気がつかなかったがモニターに写っていた戦闘は消えていた。

「じゃあ、教室に戻りますかね。」

「あ、まってよシーシ〜。」

僕はアリーナを出て教室へ向かった。

~~~~~

「一夏さ〜ん、亮さ〜ん。待ってください〜い。」

「ん？シンか。出来ればそんな赤の他人のような接し方をしないでくれないか？」

「そつだぞ。名前くらい呼び捨てでも構わないのに。」

「えっとその・・・はい。一夏！亮！」

僕は単純に喜んだ。

あえて言うなら僕は亮には会ったことがある。

一夏はデータでしか知らないけどね。

ああ、データってのは探し当てたデータと東さんが教えてくれたことだ。

「あーすいません。今日はちょっと用事があるので失礼します。

呼び止めといて悪いんですがごめんなさい。」

「いいよ。気にしないでくれ。」

「ありがとう。じゃ〜！」

そういつて僕は指定場所のアリーナへ向かった。

9話 / First remove the limiter ! &quot;

あれ？

まだ1巻も終わってないのに盾無さんが出てきてる・・・？

今は放課後とある場所・・・ではなく指定された実習用アリーナの真ん中にいた。

「盾無さん。今この戦いを見てるのは？」

コレだけが気になる。

この戦いでは本気を出さなければいけない。

しかし、誰か関係のない人に見られては困るのだ。

「大丈夫だよ。虚ちゃんと本音ちゃんに、織斑先生だけだから。」

ふーん。

「他には？」

「生徒は入れないよ。生徒会長権限で貸しきつてあるから。」

そうなのか。

「（じゃあ）これで、本気で戦える。」

「ふうん。スウェーデンの狂犬の本気見せてもらおうよ！」

「さあ、地獄の<sup>ロンドン</sup>舞踏でも踊ろうか・・・!?!」

ふふふ、久しぶりに全力で<sup>たたかえ</sup>模擬戦ができる。

いくよ！学園最強のIS使い！！

~~~~~

これより、学園最強更識盾無対神代シンの試合を始める・・・

では、はじめ！

「さあ、お先にどうぞ戦乙女？」お嬢様

「じゃあ、遠慮なくいかせて貰うわ狂犬君！」

戦いが始まった。

僕は右手にケルベロス、左手にトライハウンドを展開する。コイル  
相手はその手に大型のランス 蒼流旋と一致 を展開していた。コイル

「ほら行くよ！！！！」

そう言った頃にはもう目の前に彼女はいた。

「くっ！！」

今の状態だとかわすので精一杯だ。

仕方がない

「ケルベロス第一リミッター開放！！吼える獵犬！！」ケルベロス

僕はリミッターを開放した。

今私は目の前に居る世界で3人目のISを操縦できる‘男性’と戦っていた。

私は開始してから手に持った武器で攻撃し続けている。

傍から見れば私が押しているように見えるがそうではない。

私が押されているのだ。

相手は回避だけ・・・でも、回避の仕方がほかとは違う。

明らかに、ただ回避するだけではなく、いないないしているのだ。

「（このままじゃ埒があかない。）」

どうしたものか・・・考えていると目の前の彼が語り出した。

「ケルベロス第一リミッター開放！！吼える獵犬ケルベロス！！」

なに・・・？今、リミッターと言わなかったか？

「嘘・・・！？リミッターをつけていたというの！！？」

「僕に第一リミッターを外させた人は君だけじゃない。」

……でも、貴方には見せてあげるよ、僕の本気の一部を……！」

彼はそう言って私と向き合った。

9話 / First remove the limiter ! &quot;

いけたら今日中にもう一話いきます。

10話 / Battle! ! Student Council Race!

これで今日はラストです。

うわ、やっぱり戦闘描写は文才のない作者には書けない。

10話 / Battle ! Student Council race !

今日の試合、俺はぎりぎりでファーストシフト一次移行を終え、

なんとか戦いに勝つことが出来た。

とは、言ってもシンと一夏のおこぼれを貰うような勝ち方だったが。

「なんかな〜。」

リミッター解除！！吼えるケルベロス猟犬！！」

俺は声がしたアリーナの観客室に入った。

そこから見えたのはISを纏っているシンと

「嘘……だろ……。」

更識盾無。俺の想い人がいた。

〈亮SIDEEND〉

「ん？あ！どうやら新しい観客が来たみたいだよ、会長さん。」  
確かに来た。

穴神亮。裏に生き、今、表舞台に立っている男。

「うそ……あれは……亮君！？」

「亮を知ってるみたいですが、この学園に居るのは知らなかったんですか？」

「ええ。格好の悪い所を彼に見せるわけにはいかないわね。」

ほんとに、

「会長も、ただの恋する乙女ですね。」

いいでしょう………

その気持ち本気で相手をしてあげます。

「……え？」

「ケルベロス、第2リミッター解除、蹴散らせ狂犬！」  
ケルベロス

仕方がない。

本気でくるなら、本気で答えなきゃいけないじゃないか……。

「さあ、喰い散らせよガラムー!!」

僕は全てのビットを展開した。

「さあ、地獄の鎮魂歌レクイエムでも聴いてもらおうか……!!」

全てのビットで彼女を囲み、両手の銃で撃ち続けた。

「!!!?つくう……」

「ほらほらあ!!--」

「ええい!!--」

なあ!?!もう回避してきた。

……流石は学園最強と言っわけか……。

「なら、コレでどうだ!!--ガラム!フォームソード!!--」

全てのガラムの先からビームの刃が出てきた。

そして、両手の銃からもビームの刃が出ている。

「切り刻む!!--」

「!!!?ま、まだあ!!--」

しかし、操るのは人間。……弱点の一つや二つはある。

「そこお!!--」

「きゃあ!!--」

キーン

「盾無!!--勝て!!--」

「もう、亮君たら、そういわれたら勝つしかないじゃない。」

ゾクリ

嫌な予感がした。よく見ると水がランスに集まっている。

「やらせるかあ……！」

「私の勝ちよ……！」

ミストルテインの槍 発動

ドガーン……！！！！

僕は煙に包まれた。

~~~~~

結果からいくなら僕の負けだった。

「っていつか亮。ここ、生徒会の貸切らしいよ。」

「げえ。マジかよ。」

「てか、何で此处に来たの？」

「ん？なんとなくな〜？」

なんとなくかよ……！まったく「りょーくーん……！」来たね。

「な!!!? 盾無くっ付くな!」

「え〜いいじゃない別に。」

彼女の口元を隠しているセンスにはブーブーと書かれていた。

「んん! とりあえずシン君には会長権限で生徒会に所属してもらいます。」

えーと、その、できればその・・・亮君にも所属してもらいたんだけど・・・。」

「俺は別にいいぞ。」

「本当!!!?」

「あ、あ、ああ。」

てか、近いって!!!」

「へ? あ////」

見てみるともう鼻と鼻がぶつかるとくらい近くに顔があった。

「じゃあ、僕は帰りますね。それじゃあ。」

「待ってくれシン。じゃあ、盾無。また明日な?」

「うん! じゃあ、明日ね〜!!!」

僕はそのまま、亮を無視して寮に帰った。

10話 / Battle! Student Council race!

誤字脱字ありましたら教えてくださいと嬉しいです。

感想よろしくお願いしますm( )m

外伝 / P a s t 前編 (前書き)

1章が終わったのと、P V 8 8 9 2 3、ユニーク1485というこ  
とで

こんな駄作者が書いた駄文がここまで来た記念に書くことにしまし  
た。  
どぞ。

## 外伝 / P a s t 前編

・・・これは4年前の出来事だった。

僕は5年前気がついたときにはどこかの研究所みたいな所にいた。

その時の僕は恐れていた。

・・・何につて？それは

記憶が曖昧で本当に自分の記憶かどうかが分からないことにさ。

これから話すのはそれから1年がたった頃の物語・・・

・・・僕が『<sup>罪</sup>シン』を名乗ることになった出来事の話・・・

~~~~4年前~~~~

真っ赤に燃える建物の中に彼はいた。

ISをまもって。

本来、ISというのは女性にしか動かせない。

IS 正式名称『インフィニットストラトス』。

宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツである。



「何事？東さんの秘密基地の中に侵入してくるのは……」

そう言った彼女の名は篠ノ之東。現存するIS全ての母である。

ドガン！！！！！

彼女が言った直ぐ後に最後の扉は破られた。

「いったい君は誰なんだい！？」

「貴方は……誰でもいい助けて……。」

そういうと目の前のISは粒子に戻り中から少年が出てきた。

「これは……！！男の子がISを動かした！！？」

この少年は一体何者なの……完璧にして十全な東さんの基地に侵入しただけじゃなくISまで動かすなんて……。」

彼女は困惑していた。

なぜなら、此処のセキュリティには絶対の自信を持っていたからだ。

しかし如何だろう？目の前の少年はいとも簡単に潜り抜けたただけではなく、女性にしか動かせないISさえも動かしたのだ。

「ふふふ、ははははははは……！！」

つまり、彼女の常識をぶち壊したのである。

「気に入ったよ君。東さんは興味がわいたよ。

こんなのりょーくんのとき以来だよ！！」

彼は気を失っている。

よってこの声は聞こえていない。

この空間には笑い声のみが響いた。

外伝 / P a s t 前編 (後書き)

ちなみに後編は近いうちに更新します。

「う、うん。ここは？」

僕は目を覚ました。

周りには山済みにされた機械、機械、機械……

「ん？目を覚ましたのかい？」

「はい。すみませんでした。」

「ん？なにがだい？」

「こうして勝手に侵入した上に扉を壊してしまったことです。」

「それはいいよ。おかげで君に会えたからね。」

「ところで君の名前はなんだい？どうしてISを動かしてるんだい？」

「わかりません。覚えているのは『神代』という苗字と  
たくさんの『罪』を犯したって事くらいですね。」

「じゃあ、この束さんが名前を付けてあげる。」

君の名前は『神代シン』。

沢山の罪を負った神代姓の罪のの代行者シンだよ。」

シン……僕の名前……

「ありがとうございます……」

「でさ、このISのこの武器、誰が作ったの？  
このシステムはビックリだよ、こんなに威力を上げることができ  
るなんて。」

あ、その武器は……

「僕が一から作りました。研究者達の目を盗みながらなんでシステムも未完成ですけど。」

「そんな……これをしーくんが作ったって言うの？」

「はい。」

「気に入ったわ。東さん君のためにこの機体を改造してあげる。」

うん。

「それ、僕も参加していいですか？」

「ん？いいよ。」

あと、私のことはプリティ・東さんでいいよ。

あと、私の手伝いをする間は生活も保障するから安心していいよ。

「

「あ、ありがとうございます……その、東さん……。／／」

「うーカワイイ……」

~~~~~

こうして僕はこれから1年と4ヶ月ほど東さんと過ごす事になった。

この出会いが多分僕の運命を大きく変えることになったんだろう。

まあでも、このおかげで僕は家族の温もりというものを一時期でも  
知ることが出来たのだから・・・

外伝 / P a s t 後編 (後書き)

如何でしたか？

……翌日

「では、一年一組代表は織斑一夏さんに決定です。

あ、一繋がりでいい感じですね！」

山田先生は嬉々として喋っている。

そしてクラスの女子も大いに盛り上がっている。

そして、反対に一夏はとくっても暗い顔をしている。

「先生、質問です。」

手を上げて質問する、これは基本だね。

「はい、織斑くん。」

「昨日俺は脱落して勝ったのは亮の筈なのになんで俺なんですか？」

「それは……それは私が辞退したからですわ!!」「……」

「まあ、勝負のほうは……」「じゃあ、亮は何で?」「……」

「俺の場合は昨日の内で生徒会に入るのが決まっちゃったから。」

だよー。普通に考えると一夏も辞退できるハズなんだけれど……

「じゃあ……」「僕も昨日の内に生徒会に入ったから出来ないよ。

ごめんね一夏。」「……んなー!!」

「クラス代表は織斑一夏。依存は無いな。」

はーいと（一夏を除く）クラス全員一丸となって返事をした。

うん。団結はいいことだよな。

~~~~~

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。

織斑、神代、宍神、オルコット。試しに飛んで見せる。」

四月の下旬。春の暖かな日差しの下、僕らは外でISについての授業を受けていた。

・・・おっと、授業に集中しなきゃ。

（いくよ相棒<sup>buddy</sup>）

僕は僕の機体を起動させた。

起動するまでの時間わずか0.4秒。

周りから見ると黒い光に包まれて気が付いたら纏ってるって感じだね。

周りを見ると一夏が叩かれてた。・・・亮はもう起動してるのに・・・。

一夏、不憫な子!!

「よし、飛べ！」

言われてオルコットさんの行動は早かった。言われてから飛び立って直ぐに遙か上空に着いた僕が言える事じゃないけどね。

かなりチートだな主人公（by作者）

何かの電波を受け取ってしまったようだ。いかんいかん。

ちなみに、僕はISスーツを着てるわけではない。

僕のはISスーツと同じ材質で作った皮製のジーンズっぽい長ズボンを穿き、上にはISスーツの上着を着て、ベスト（これも素材はほとんど変わらない）を着ている。

そのまま、その上にISを装着するので結構目立つ。

っていうか上はアーマーをつけているので見えないし、色も黒で被って分らない。

・・・まあ、そんなことは置いといて

「ちなみに、オルコットさんは普通に着陸しているのに、一夏は地面に墜落した。」

「お前何気に酷いなあ！！」

「じゃあ、次は僕が行くよ。じゃあね。」

僕は地面に向かい降りていった。

警告 もう少しで地面につきます!!

まだ、まだだ・・・そこ!!

このタイミングと思った所で上半身と下半身を入れ替え、地面に向かいジェット噴射をするイメージをする。

14・・・13・・・12・・・11・・・よし、成功だ!!

10cmピッタリで止まった。・・・とは言っても国家代表たるものこれくらいはできないとね。

隣を見る・・・亮もなんとか着地できたみたいだ。

「諸君！諸君らも神代のようにできるよつにとは言わんが、オルコツト並みにはできるよつに！」

いいな。よかつたら返事をしろ！」

『は、はい!!』

「よしでは、織斑武器を展開オープンしろ。」

「は、はあ。」

「返事ははい、だ。」

「は、はい!!」

一夏の手が粒子が集まっていく。

そしてそれは剣になり、一夏の手に収まった。

「一夏。それじゃ遅いよ。」

「神代の言うとおりで。0.5秒で展開できるようにしろ。」

「……はい……。」

その後、オルコットさんとかも指名されたんだけどオルコットさんは近接装備の展開に手間取っていた。

「最後に神代。手本を見せろ。」

「……了解。」

僕のイメージは素早い二匹の猟犬……展開!!

「展開時間0.2秒……十分だ。」

「ありがとうございます。」

「よし!では今日はここまで。  
織斑は穴を片づけとけ!!」

「じゃー夏。がんばってね。」

僕は更衣室に戻った。

そんな~~~~!!とか聞こえてくるけど気のせいだ!

12話 / Congratulations to determine the

おくれました。すいません。

久しぶりの投稿ですがどうぞ!!

パンパンパン

「織斑君クラス代表おめでと〜!!」

みんなは明るい顔をして楽しんでる。

反面一夏はとても暗い顔をしている。

そして僕はちよつとケーキを作っている・・・亮と。

よく見ると「織斑一夏クラス代表就任パーティ」とでかかど書かれている。

「りよ〜う〜! スポンジのほうは〜?」

「おう! もう少しで焼けるぞ。」

「お〜っけえ〜。」

今、僕はケーキに乗せる果物を、亮はケーキのスポンジの様子を見ながらクリームを作っている。

「はいは〜い、新聞部で〜す。話題の新生織斑一夏君と宍神亮君、スウェーデン国家代表の神代シン君に特別インタビューをしてみました〜!!!!」

「へ?」

『オ〜!!!!!!!!』

オ〜じゃないよオ〜じゃ。

「あ、私は2年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長をやっています。はいコレ名刺。」

う〜ん。画数多すぎないかな? 書くのめんどくさくないのかな?

「亮。ケーキにクリーム塗るからスポンジ切つて〜!!」

「おう、わかった!」

亮はすぐく手際がいいからすぐく助かる。

「さてと、スポンジとクリーム持ってきて〜!!」

「今もつて来たぞ!」

僕はクリームを慎重に塗り始めた。



「まあいい。せっかくだからな。私も参加しようか。」

『おお〜!!!!』

「さあ!今日は楽しむぞ!」

あれ?織斑先生いつもと違う・・・?

『オ〜!!!』

はあ・・・。コレ何時まで続くんだろう・・・。

13話 / Candidates attack Chinese representatives

はい。ついに今日でサイドストーリーが終わりました。

これからは本編だけになります。

つー訳でござー！

〱〱翌日〱〱

はあ、昨日は疲れたな・・・。

なんでつて？そりゃあ何故か織斑先生も参加して11時過ぎまでパーティーをやったからだよ。

眠いなあ・・・。

「・・・中国代表・・・音・・・は・・・ってわけ・・・。」  
ん？誰かいるのかなあ？まあ如何でもいいけど・・・。

「馬鹿者。とつと頭を上げんか。」

バシン！！

はい。さっそく出席簿アタックが来ました。

「（おかげで眠気もバツチり覚めたけど。）」  
授業？そんなものほとんど覚えてないよ？

〱〱〱〱〱〱

「待ってたわよいちかあ！そして亮！！」  
ん？あれって・・・

「あれ？中国代表候補生のリンインさんだ。やつほ。」

「へ？な、なんでアンタがいるのよ！！」

「なんでつて、入れられたから？」

「なんで疑問系なのよ！！」

ん？何でだろう？

「つていうかシンって鈴と知り合いだったのか？」

それはねえ・・・

「ほら僕ってスウェーデン代表じゃない？」

だから、各国の代表や代表候補生とたまに模擬戦をするの。」

「ああ。だから知り合いなのか。」

わかってくれて何よりです。

ちなみにご飯は・・・

一夏：日替わり定食

亮：豚しょうが焼き定食

僕：カツ丼大盛り×2・カレー特盛り・親子丼・牛丼特盛り・カル  
ボナーラ・焼きそば×2・ステーキ×3枚・餡蜜×2・みたらし団  
子×20・ストロベリーサンデー・チョコレートパフェ×2  
リンインさん：ラーメン

セシリアさん：洋定食

篤さん：鯖の味噌煮定食

本音：ランチセットB（サンドイッチ・飲み物・その他少しのおか  
ず）

だった。

・・・ん？僕のご飯の量がおかしい？

違うよ。皆が少ないんだよ。

「シーシーそれは違うと思うよ・・・。」

なんと！！本音に心を読まれた！！

「なあシン。いつも思うんだがよくそんなに食えるな・・・。」

「え？コレが普通じゃないの？」

え？え？皆どうしたの？頭抑えて、痛いのか？

「シーシー。あっちで一緒に食べよー。」

「わかったよ本音。じゃあ一夏、亮また後でね。」

「おう。また教室でな。」

僕は本音と一緒に、岸本さん？と鷹月さん？がいる席へと向かった。  
ちなみに僕は料理を持っていない。

だってあんな量もってこれるわけないでしょ普通。

という訳で昼食は何も無く平凡に終わった。

ちなみにOPはハルヒのGod knowsかなあと作者は思います。  
辛口でもいいので感想よろしくお願いします!!! m | | ( m

~~~~~放課後~~~~~

第三アリーナにて、一夏とセシリアさんの特訓を行っているため僕も見学に行った。

実はこの特訓を見るのははじめてだったりする。

意外だったのは、そこに篝さんがいたことだ。しかも純国産の量産型IS『打鉄』を装着している。よく使用許可降りたな。

そうこうしているうちに、篝さんは一夏に斬りかかった。打鉄の基本武装も刀型近接ブレードなため、剣道部の彼女にはよく合っていた。

だがセシリアさんは訓練の邪魔をされたくないらしい。篝さんの袈裟斬りを流し、自身のトリガー『スターライトmk?』で応戦……って、これ一夏の特訓じゃなかったか？

最終的に一夏は二対一で戦う羽目になっていた。可愛そうに……。

ちなみに亮は僕と一緒に模擬戦をずっとしていた。

~~~~~  
~~~~~

「一夏。大丈夫？」

訓練が終わったので一夏に声をかけた。

「ああ。死にそうだがな……。」

……それって大丈夫とは言わないと思うけど……。

「そう。じゃ、僕は先に行くから。亮、一夏、また明日。」

「おう。じゃあな。」

「ん？お前飯は？」

「あはは。今日は寮の部屋の簡易キッチンでなんか作って食べるからいいよ。」

「そうか。じゃあ明日な。」

その言葉を聞いて僕は部屋へ向かった。

その途中リンインさんと会った。

「一夏ならそろそろアリーナの更衣室にいるころだと思っよ。」

「そう。ありがとねシン。」

あれ？いつもみたいに元気じゃない。どうしたんだろう？

……まあいいか。

「じゃあ、リンインさん。また明日。」

「うん。じゃあね。」

くくクラス対抗戦<sup>リーグマッチ</sup>当日くく

結局あれから数日が経ってクラス対抗戦の当日になった。

一夏が暗い顔をしていたので事情を聞いたところ

「鈴を怒らせちゃった」とのことらしい。

馬鹿じゃないだろうか・・・。

まあ、試合をしっかり見てデータを集めますか・・・。

そういえば一回戦は一夏（1組）対リンインさん（2組）らしい。

・・・一夏・・・大丈夫だろうか・・・。

15話 / Attack Variant of IS! (前書き)

ようやく更新です。

## 15話 / Attack variant of IS!

「はじまつたみたいだね……。」

一夏はクロスグレットターン三次元躍動旋回を使い、リンインさんを正面に捕らえた。

しかし、一夏は見えない攻撃によって吹き飛ばされていた。

「衝撃砲……かな？」

「なあ、衝撃砲ってなんだ？」

「亮か。」

衝撃砲って言うのは空間自体に圧力をかけて砲弾を生成、

余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して打ち出す第三世代兵器だよ。」

「ちなみに、弾も砲身も見えないみたいね。」

「た、盾無さん。何時からそこにいたんですか？」

「ん？さつきからよ。」

「さ、左様ですか……。」

「おほん。とりあえず続けるわよ。」

見えるとしてもせいぜいが肩の装甲の発射口くらい。

それにあの形状からして、射角の制限も無いと見えるわね。」

「へ」

そんな会話をしていたとき、試合は傾いた。

「鈴。」

「なによー夏。」

「本気で行くからな。」

「何言ってるのよ。当たり前じゃない！」

イグニッションブースト  
瞬間加速の使いどころ・・・此処だ!!

「うおおおおお!!!!」

ドガン!

俺が鈴に攻撃を加えようとしたその瞬間アリーナのシールドが何か  
によって破壊された。

「な、なんだ!?!」

煙が晴れて見えてきたのは・・・

黒い全身装甲フルスキンタイプのISだった・・・。

「マズイ！あのビーム出力は並大抵のものじゃない！  
盾無さん！亮！2人は観客の避難誘導を！！！」

「シンはどうするんだ！？」

「僕は皆が逃げ終わるまで此処にいる。

もしも場合のガード役は必要だからね。」

「そう、じゃあ、気をつけてね。」

「了解！」

亮たちが離れていくのを確認した。

（守り抜くよ。だって僕たちは守護獣だから。ケルベロス）

「リミッター第2開放！蹴散らせ狂犬！！」ケルベロス

ケルベロスの機体色が黒と赤、そして、一部に金色の線が入ったものになる。

「さあ、お引取り願おうか。」

15話 / Attack variant of IS! (後書き)

微妙な伏せん入りました。

この章が終わったらリミッターについての説明をさせていただきたいと思います。

最後に、こんな駄目作者が書く駄文を読んだけいただきありがとうございます！

できれば感想などお書きいただければ嬉しいです。

では、また次回！

## 16話 / Action start (前書き)

気が付いたらお気に入りやPVなども意外に増えていてビックリしました。

この章が終わった辺りでケルベロスのリミッターについて説明します。

では、本編どうぞ！

## 16話 / Action start

「3体もいるなんて・・・面倒だね。」

彼がモニターで見てる先にはさっきの黒いISが3機、佇んでいた。

「（まず一機。確実に破壊する。）」

手に持ったヘルデストロイに思わず力をこめる。

「（いまだ！）殲滅する！」

ジュードーン！！

ドガン！！

「織斑先生！」

「なんだ？」

「生徒会所属 神代シン、生徒保護のため出撃させていただきます。」

「了解した。「あと、」なんだ？」

「出た後でレベル4でシールド張りなおしてください。」

「わかった。死ぬなよ？」

「了解！突入を開始する！」

僕は穴を通りアリーナ内部へ向かった。

~~~~~

「くそ、敵が強すぎる……!!」

「一夏!ぼさつとしてないで!」

「ちい!」

俺らは今、突如現れたIS(なのか?)と戦っている。

敵は攻撃・防御・援護の3機に分かれており、俺らは攻めかねていた。

……が、

いきなり観客席のほうから凶太いビームが出てきて防御型の機体を飲み込んだ。

「なんだ!?!」

俺は正体を確かめるためにそちらに視線を向けた。

「アイツは!!」

「シン!!?!」

そこには全身に紅い線が入り、所々鋭利な形状になったISがいた。

「待たせたね2人とも……さあ、こいつ等にはお引取り願おうか。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「一夏たちはそっちの援護型をやつて。僕は攻撃特化をやるから。」

「おまえは1人で行けるのかシン?」

「大丈夫。簡単には負けないよ。僕は国家代表なんだから。」

「負けない」これは確実にだ。

「さあ、<sup>ミッションスタート</sup>作戦開始だよ！」

僕らはそれぞれの敵に向かっていった。

「さあ、君の相手は僕だよ。準備は……<sup>Are You Ready?</sup>……いいかい？」

16話 / Action start (後書き)

初 次回予告を入れてみたいと思います。

~~~~~  
アリーナでの彼らの戦いは続く。

圧倒的な力で敵を倒しているシン  
攻撃が当たらずなかなか倒せない一夏と鈴

そして、終わったと思ったときに現れたイレギュラー

戦いの結末はいかに………!

次回17話 / Truth

番犬はついに本気を見せる………。

~~~~~  
いかがでしたでしょうか？

出来れば感想などいただければ嬉しいです。

では！

18話 / Truth 前編 (前書き)

今回は予想外に長くなってしまったため前編・中編・後編に分けることにしました。

では、本編どうぞ！

18話 / Truth 前編

「ほらほら！その程度かい！？はははは！！」

そこはまるで地獄のようだった。

大出力のビームが降り注ぐ中、その発生源に向けてビームが降り注ぐ。

「遅い、おそおおい！！！」

彼の異名「漆黒の狂犬」というのはこの状態の彼からついたらしい。

「これえでえ終わりだあああああ！！！」

彼の荷電粒子ビームキャノン ヘルDESTロイから発射されたビームが全身装甲の機体を飲み込む。

「はあ、ハア、これで、終わったみたいだね。」

こちらの戦いはワンサイドゲーム一方的な攻撃で終わった……。

~~~~~

アリーナに侵入者が入ってきた。しかも、アリーナのシールドを打ち抜いてだ。その侵入者は、ステージの中央に降り、その時の衝撃によって、もくもくと煙を立てている。

「な、何なんだ？何が起こって……」いまだに状況がわかってい

ない一夏は、混乱していた。すぐに鈴からの通信が入ったようで、落ち着きをだいぶ取り戻した。

「お前はどうするんだよ!?」どうやらオープン回線になったようだ。俺もいまだにプライベートチャンネルは、使い方がわからない。頭の後ろつてどこ?

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ!」

「逃げるって・・・女をおいてそんなことができるか!」

向こうを見る。

「(シンだつて頑張ってた。おれだつて・・・)うおー!」!

しかし、これも外れる。

「くっ……!」

一撃必殺の間合い。だが、一夏の斬撃はかすることすらしない。もうこれで4度目のチャンスだった。

「一夏っ!ちゃんと狙いなさいよ!」

「狙ってるっつーの!」

普通ならかわせるはずのない速度と角度での攻撃。普通の敵なら既に戦闘不能に陥っているはずだ。

・・・だが。

「なんて素早さなのよ……っ、コイツ!」

その装甲の厚さとは裏腹に全身に付いたスラスタの出力が尋常ではなく、零距离から離脱するのに1秒とかからない。

しかも、どれほど鈴音が注意を引こうが白式の攻撃には反応して離脱する。

まるで、理屈ではなく脅威度で攻撃を見ているかのようだ。  
「（何であたらねえんだ。）」

シールドエネルギーも残り少ない。

「鈴、あとエネルギーはどのくらい残ってる？」

「180つとところね」

やはり、厳しい事になっている。

ドガンー！！

あちらは大きな爆発が起こり終わったみたいだ。

「（こつちだつて・・・うん？）なあ鈴。」

「何よ？」

「あいつの動きってなんかに似てないか？」

「なによ？コマとか言うんじゃないでしょうね？」

「違う。なんか機械じみてないか？」

「ISは機械じゃない。」

「そういうことじゃない。もしかしてあれ無人機じゃないのか？」

「無人機！？でも、ううん。無人機なんてありえない、ISは人が乗らなきゃ動かないのよ。」

「でもシンは全力で躊躇無く撃ってる。」

「っ……じゃあ、無人機だとしたらどうなるの？ それなら勝てるって言うの？」

「うん、その通りだよ」

俺が言おうと思ったときシンが割り込んできた。

「シン……？」

「【零落白夜】。白式の単一仕様能力で、雪片式型の全力攻撃だ。

雪片の威力は高過ぎて、訓練や学内戦じゃあ全力を使えない。でも無人機相手になら、容赦なく攻撃しても問題ない……！」

「そういうことか！」

「でもシールドエネルギーが足りない。」

「それに、零落白夜だかなんだか知らないけど……攻撃そのものが当たらないんじゃないわよ？」

「一応クリアする方法はある。」

ただ、これは本気で危険な賭けになる……それでも良い？」

18話 / Truth 前編 (後書き)

次回 Truth 中編

また見てください！

19話 / Truth 中編 (前書き)

連続投稿。

新しい敵。

キーキャラクターが出てきました。

では本編どうぞ！

「一応クリアする方法はある。

ただ、これは本気で危険な賭けになる……それでも良い？」

低いトーンで語られる言葉。それだけで、危険度が半端なものではないと伝わってくる。

「……ああ、構わない。」

「本気がいい？」

「お前が考えた作戦だろう？ 成功しない奴を考えたんじゃないだろ？」

一夏に逆に返され、シンは苦笑する。

「………いや、絶対に成功させれるよ。」

「じゃ、それで行こうぜ！ 鈴も良いな？」

「まったく………内容ぐらい、聞いてからにしなさいよ？」

「作戦を説明するよ。まず甲龍、白式、敵と並び、且つ僕の指定するポイントを延長線上に置く様に移動。

そしてリンインさんが一夏の背に向かって、フルパワーの衝撃砲を撃つ。」

「ちょっと！？ いきなり、とんでもない事言わなかった!？」

「で、一夏は瞬間加速を発動する。衝撃砲のエネルギーを推力として取り込むんだ」

「……なるほど、イグニッションブースト瞬間加速の理論を使うのね？」

イグニッションブースト瞬間加速はスラスタから本体に向けてエネルギーを放出。それを吸収、圧縮させてから爆発的に解放することで、超加速を得る。

つまりは理論上、どんなエネルギーも推力に転換できるという事だ。

「衝撃砲のエネルギーを取り込むと同時に、エネルギーバイパスを

雪片に直結。一部エネルギーを零落白夜の発動に回す。」

「そんな事が出来るのか？」

「零落白夜は、”シールドエネルギーを含めた全エネルギー”を攻撃に転換するから理論上、何とかできる筈。

それに機体は操縦者の期待にきつと応えてくれる。」

「なるほど……それで、何が問題なんだ？」

「その時に一度、シールドと絶対防御を強制的に遮断する。一夏はIS装甲だけで、衝撃砲を受け止めなきゃならない」

「っ……！？」

「ば、バカじゃないの！？ そんな事したら一夏が死んじゃうじゃない！！」

「これが生きてると衝撃砲に反応して、シールドエネルギーを全部使っちゃうんだ。だから、切るしかない。だから危険なんだ。」

「そんな……無茶苦茶よ！！」

「無茶は百も承知。だから聞いたんだ。」

「そんな……！！危ないわよ！！ 一夏、別の方法を考えるべきよ……！！」

「 いや、シンが成功できるって信じてくれてるんだ……その想いに応えてやらなきゃいけないだろ？」

キツと鈴を見据える一夏。その迷いも恐れもないまっすぐな瞳に、鈴は言葉を詰まらせる。

「っ……！ 分かった、分かったわよ！！ こうなったら信じてやるわよっ……！！」

一夏がこうなったら梃子でも動かない。それは幼馴染である鈴にはよく分かっている事だ。

実際、良い代案も無い以上、これに賭けるしか無いのも事実。

「出来ればシンも支援してくれ。」

「わかった。」

「よし、それじゃあ、作戦開始だ……！」

「一夏あああああああああああッ……！」

「……ッ!?」

いきなりアリーナに響いた声に、一夏達はギョツとした。

「一夏、あそこに篠ノ之さんが……！」

シンが指し示した方向、アリーナの実況席。そこにマイクを持った  
箒の姿があった。

「男ならば……男なら、それぐらいの敵に勝てず何とするっ……！」

あらん限りの声を張り上げ、箒は激を飛ばす。あまりにも大きい声  
に音が割れてしまっているが、それでもそれはよく聞こえた。

そう、アンノウンにも（……………）。

アンノウンは左後方にある実況席に、センサーレンズを向ける。そ  
してそこに向けて巨腕を掲げた。

「ちよっと、何やってのよアイツ!？」

「バカッ! さっさと逃げろ……！」

一夏が開放回線オープンチャンネルで呼びかける。箒は一瞬、恐怖と驚愕にその身を揺  
すられるが、ギリツと歯を食い縛り、逆にそれを睨みつける。

光が収束する。アレが放たれれば、ISのない自分の命は危うい。  
だが、それでも退かない。

ISを持たないから、共に戦うことの出来ない自分。一夏の背を守  
れない自分。



シンが考えた作戦。箒が生み出したチャンス。信じて衝撃砲を撃つた鈴。

ここで期待を裏切るならば、男として恥じて死ぬべきだ。この程度のためなら奥歯の一本や二本、喜んで砕いてやる。

エネルギー転換率90%突破 零落白夜使用可能

溢れ上がったエネルギーがフレームから溢れ、金色のオーラのごとく立ち昇る。

それと共に、雪片の刃が更に輝きを増して巨大になる。

イグニッションブースト  
瞬時加速。

世界そのものが自分に迫ってくる。その感覚が見据えるのはただ一つ、アンノウンのみ。

(守ってみせる……千冬姉を、箒を、セシリアを、鈴を、今迄、そしてこれから関わる人の全てを……俺が、俺達がッ!!)

「おおおおおおおおおおおおおッ!!」

咆哮。アンノウンが反応し振り返りざまに突き出した右腕を、バタ

―を切るよりも軽く両断。

その威力は凄まじく、攻撃の余剰エネルギーが嵐となって吹き荒れて、遮断シールドを打ち砕いた。

「　　っ！！」

アンノウンは驚く素振りさえ見せず、残った左腕で一夏を殴り飛ばした。

「ぐはあっ！！」

全力攻撃後の無防備な所を喰らい、更に眼前の砲門にエネルギー反応。

ゼロ距離から、一夏を完全に鎮めるつもりらしい。

「残念でした！」

しかし、その瞬間に何かがアンノウンを打ち抜いた。

「ミッション・コンプリートかな？」

そう言っただけでシンは近くまで来た。

「ギリギリだな。」

「そうよ。」

「ごめん。いいポイントに行くまで時間がかかったんだ。」

「まあいいか。」

敵ISの再起動を確認　ロックされています

粉塵の向こう、動く影に一夏が目を見張った。

「一夏っ！！」

「くっそおおおおおおおおおっ！！」

エネルギーは僅か。機体はボロボロ。それでも一夏は動いた。

アンノウンは左腕を向け、既に大出力攻撃を構えていた。

「うあああああああああああああつ！！」

吼え猛り、最短距離を雪片を突き出して突進。

ビーム発射。

破壊の閃光に抗いながら、スラスターが推力を振り絞る。

「グググうう……ッ！！」

そして、一夏はアンノウンをビームごと切り裂き倒れた。

「一夏！！」

「大丈夫。気を失っただけだ。」

今度こそ終わった。そう思ったとき……

ドガーン！！

「……！！？」

うそでしょ……新手！？

「リンインさんは一夏をつれて戻って。」

「わ、わかった。」

「だ、誰だ!!」

煙から現れたのは白いケルベロスを纏った

「!!!?!」

「やっと見つけたぞ、出来損ない人形!!」

男だった……。

19話 / Truth 中編（後書き）

次回

Truth 後編

「一体、君は誰なんだ……!!!?」

「貴様は俺から全てを奪った！過去も！未来も！」

「まだ気が付かないのか！お前は俺のクローン。

出来損ないなんだよ!!！」

——運命は動き出す……。

~~~~~

軽くネタバレが入りました。

あと、できれば感想などくれると嬉しいです!!！」

20話 / Truth 後編(前書き)

後編更新。

今回は

新事実が判明！

ではござ！

20話 / Truth 後編

「 やつと見つけたぞ、出来損ない人形！！」  
「 出来損ないってどういうことだ！」

僕は牽制でケルベロスを撃つ。

彼はそれを鬱陶しそうに手に持った剣で弾いた。

「 ふん小癩な。俺は貴様を殺して全てを取り戻す！」

「 君は誰なんだ！」

「 ふん。偽者如きが！貴様は何も知らないようだな！」

何を言ってるんだ彼は？

「 所詮、偽者は偽者なんだよ！！」

「 何なんだ君は！僕は僕だ！」

「 ふん。何時までその自信が持てるかな？」

なんなんだ彼は・・・なんなんだ！

「 誰なんだ！！」

僕は牽制を続けながら喋る。

「 ふん！貴様は出来損ないのクローン。所詮偽者なんだよ！」

「 そんな・・・馬鹿な・・・。」

「 聞こえなかったのか？貴様はこの俺の‘出来損ない’の‘クローン’なんだよ！」

「う、そだ……。」

「嘘なんかじゃねえよ。」

「嘘だ、嘘だアア!!」

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘ダウソダウソダ

「ウソダアアア!!」

「ふん。壊れたか。骨の無い奴だ。」

「嘘だ嘘だ嘘だ!!」

「ふん。絶望のまま死ね!!」

「グウアアア!!」

目の前が……暗く……

「そこまでだソロ。お前はもう戻れ。」

「なんでだ! もう後一撃で殺せるのに!」

「そいつを殺すのはお預けだ。」

「そいつはまだ使い道がある。」

「ちつ。了解。」

よかったなあ生き延びれてよお。次会った時は絶対殺ス!!」

そういつて彼は飛んでいった。

それを見送った後、僕は気を失った。

20話 / Truth 後編 (後書き)

次回予告

敵に心まで砕かれたシン。

彼は自分が誰なのかわからなくなる。

「僕は一体誰なんだ・・・？」

その時現れた少女

「馬鹿！ シーシーはシーシーだよ！」

次回・・・Own

それは復活と恋の始まり・・・

## 21話／OwO (前書き)

今回、ようやくのほんさんがヒロインらしい活躍を……!!

では本編どうぞ！

## 21話 / O W n

「僕は一体誰なんだ・・・？」

『お前は出来損ないのクローンなんだよ』

「違う、僕はクローンなんかじゃ、」

『本当にそうだと思ってるのか？』

敵が言った言葉が僕を押しつぶそうとする。

「ぼ、僕は・・・ぼくはっ」

コンコン「シン、はいるぞ」

「い、一夏・・・」

「大丈夫かシン？」

「うん」

「本当にか？顔色悪いぞ」

「だいじょうぶだよ」

「なにかあったのか？」

「一夏には関係ないよ」

「関係ないもくそもあるか！仲間だろ、俺ら」

「じゃあ、一夏に僕の何がわかるんだい！」

「そ、それは」

「もういいよ。お願いだから一人にして・・・」

「・・・悪い、じゃあな」

「うん」

「ひとつだけ言わせてくれ・・・誰にもわからないさ他

人のことなんて・・・

・・・でも、俺らは仲間だ。仲間ぐらいたよってくれよ」「  
そういつて一夏は出て行つた。

「仲間・・・か。僕は人かどうかもわからないのに・・・」

コンコン

「シーシー見舞いに来たよー」

「本音・・・ですか？」

「うん！」

「帰ってください、僕は一人になりたいんです」

「なんで？」

「僕はクローン、人形バケモノなんです。」

あなたに会う権利なんてありませんよ」

「・・・え？」

「僕はね人じゃないんだよ。ただの劣化コピーなんです」

なんでこんなことを彼女に話しているのかわからない。

でも、聞いてほしいのかもしれない。この悲痛な気持ちを。

「つまり、あなたの知り合いの僕じゃなくて、違う人かもしれないんだよ？」

「馬鹿っ！」

「・・・え？」

「シーシーはシーシーだよ！」

2年前周りの人間と比べて劣等感を抱いていた私を励ましてくれた神代シンだよ！」

「どうやって信じて言うんですか。この記憶だってどこまでが本物かわからないんですよ！」

「少なくとも此処にいるのは私の知ってる内気でやさしいシン君だよ！」

「・・・本音・・・」

「だから、自分のこと人形バケモノだなんていわないで！」

本音・・・僕は・・・何をしていたんだろうね・・・。

「そうだね。ありがとう本音、僕は僕だよね」

「うん！シーシーはシーシーだよ！それ以外の誰でもない、シーシー自身なんだよ！」

「ありがとう。気づかせてくれて」

彼女をやさしく抱き寄せる。

「う、うん／＼」

「さあ、じゃあご飯食べに行こ？」

「うんー！」

「（僕は僕、神代シンだ！）」

僕は自分の心にしっかりと刻み込んだ。

## 21話 / O W N (後書き)

### 次回

ついに復活を遂げたシンは自分を戒めるために自分を変える。

「僕は・・・いや、俺は神代シン、'罪の代行者' シンだ！」

22話 / C h a n g e s f o r c a u t i o n

狂犬はついにその本気を開放する・・・!!

## 永久凍結について

このたびはこの作品をまことに勝手ながら凍結させていただきます。

理由といたしましては、第一に連載していく自信がないことと、少し物語で矛盾が発生しているからです。

もうひとつは凄くグダグダだったからです。

今までこの作品を呼んでくださっていた皆様、本当にありがとうございました。

引き続き、成層圏を狙い打つ男の方をよろしく願います。

あちらではこちらのようにならないようにするのでこれからもよろしくお願い申し上げます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2368t/>

---

Infinite Stratos theHellhound

2011年7月19日17時39分発行